
じゃ、またね

仔猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゃ、またね

【Nコード】

N7927Y

【作者名】

仔猫

【あらすじ】

予想をすれば世界はそれにより動き、僕の思考で全ては決定される。

僕はこの世界の神様です。

創めて（前書き）

始まりの文。

創めて

その世界には人間がいまませんでした。

勿論、人がいないから町も街灯もありません。文明も言語も同じく存在しません。、、スイマセン。町も街灯もあるけどそれはもうその機能を酷使して世界の自然の一部になっています。文明や言語たちにも少し休んでもらってます。よって彼らは存在しているように存在はしていません。

その世界には人間はいましたが、僕はその事実を隠しました。

世界はこれできっと平和と安らぎを得たのかな？

死神日記 1

もう何千回あの白い雲は通り過ぎていったのだろうか？

俺は死神。与えられた名は無い。

何も無い空間から神によって生ざれた、死をつかさどる化身で、人間の死の直前に現れて、魂を刈り取る概念であり、それ以外は無い。自然の摂理の如く神の命令に従うだけで、人間のように俺らは個性を所持はしていないし、性格も感情も無い。外見の特徴は全身を覆う黒い羽衣のみ。

もう何万回あの白い雲は通り過ぎていったのだろうか？

人は消えた。跡形も無く。

理由は分からないが、多分神様がやったのだろう。世界に下りていった時には朽ち果てた人類の産物が横たわるだけで、人の影はまるつきり無く、有るのは静寂のみ。

俺は死神だ。生きがいは人の魂を刈ること。しかし地上の何処にも人はいない。

ある日は寒さで凍える凍土を飛び、ある日は無限に広がる灼熱の砂漠を渡った、劃しても目的の其れは見つからない。

飽きも疲れもない俺はただひたすらに地上を回る。それが己の性。地上は植物と見たことも無い生物たちが、人の代わりにと各地で同じように見えた。どうやら自分の存在は何処にもないようだった。

死神日記2（前書き）

短く書くのじゃ。

死神日記2

無駄と悟った俺は激変した地上を後にして、天井に戻ることにした。

「よ、人いないだろ」

聖堂にも似た場所で、俺の隣に偶々いた死神はまるで空気のように口を動かした。彼にもまた名はない。感情も無い。自分と同じような古びた黒装束を装備しているだけである。

「これから何する？」

俺たちは何も無い。此処にはいない。

「幾ら地上から人が拭い去られたからって、どうって事はないだろ。何時かひよっこりと出てくる筈さ。そのときまで俺は少し寝るわ」

言っていることは妥当だった。彼と同じように周りを見渡せば同じように、同胞は地上で見たような産物のように静まり返っていた。彼等の寝顔はまるで路上に転がる石のようで、そのまま動かないようにも見えた。

俺はその中を暫くの間進んでいったが、誰一人起きているものはいなかった。まるで何時の日か見た地上の戦争の後のような有様。大してやることも無い。俺は無尽蔵に建ててある柱に背を垂らした。

もう数え切れない位の現状を見てきた俺にとってこれは一日の休息みたいなもので、何千の時が経っても俺らには人間のような二十四時間は存在しないが、人間の睡眠と随分似たものだ。ただ二十四時間が過ぎるといふ概念が、人類滅亡の時間で、人類が進化する過程で発生する時が睡眠時間である。

聖堂は寢息にも似た静寂が広がっている。まるで時間が死んでしまったかのように此処には地上のように”変化”が現れない。其処は聖堂であって、まるで地上の砂漠か宇宙空間にも似た場所で、聖職

具や長椅子、様々な彩色がある巨大で優美なステンドグラスがあたりこちらに存在するがそれらでは此処に満ちる静寂と虚無感は消える事がない。

そんな場所で俺は長い眠りつくため、何の躊躇も無く身体のを抜こうとした。そんなときだ。

「地上には二人だけ人間がいるんだよ」

自分の寄りかかっている柱とは逆の位置に彼は気配無く其処にいた。色は白。大空に浮かぶ雲のような白い装束を纏っていて、片方の腕には身長は何倍もある透紫の太刀を携えている。

「お前は？」

死神は決して微笑をしたりと感情的な行動が無いが、彼はまるで人間のように微笑し、くすくすと囁いていた。

白い服装を着ている死神なんて、人が生きている時間から存在する俺でもいたことが無い。死神の羽織る黒い服装は服装のような物であって、それは体の一部であり、解除することは出来ないように作られている。彼は一体何者なのだろうか？

「私もあなたのように名前はありません」

女にも男の声にも捉えられる声色を持つそれは、一息溜めて再度口を動かす。

「最終戦争^{ハルマゲドン}。人を壊すための兵器。それが私です」

物騒な事をニコニコと微笑しながら最終戦争という名称の白い彼は言い残し、柱に背を掛けた。

「地上に未だ人がいるのか」

死神特有の癖か、それとも死神として逃げられぬという性なのか、彼の身元よりそちらの方に自身の意思はいつていた。

「ええ。その事を此処に伝えるために神からの命令で此処に来ました、私の役目は人類を滅亡させる事、たかが二人の人間、死神に頼んだほうが効率がいいと思ひ此方に赴いたのですが、ほぼ全ての死

神が眠りについてた所、あなたがいたという次第です」
彼の話す事の顛末は知らないが、とにかく神への伝令が此方に来ているのならば、神の端末である俺は動かなくてはならない。動き、直ちに人を見つけ観察しその魂を刈らなければいけない。

全てを話終えた彼は蛇口に付いた滴が地面に消えてゆくように、彼はその場から消滅していた。

それを見て暫くして俺は無心で聖堂から消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7927y/>

じゃ、またね

2011年12月3日22時47分発行